



## 曲目解説

### ●協奏曲 ヘ短調／ヘンデル

原曲はオーボエ協奏曲第3番ト短調。ヘンデル（1685～1758）が書き残したオーボエ協奏曲は3曲知られており、いずれも青年期のハンブルク時代（1703～1706）に作曲されたと推定されているが、この曲のみ1703年作曲とわかっている。つまりヘンデル18歳のときの作品である。曲は緩・急・緩・急の「教会様式」の協奏曲となっている。なお、原曲の楽器構成はオーボエ、弦楽、通奏低音。（安藤 博）

I グラウヴェ II アレグロ III サラバンド、ラルゴ IV アレグロ

### ●幻想曲 イ短調（原曲：フルート・トラヴェルソのための幻想曲 ロ短調）／テレマン

テレマン（1681～1767）は、バッハとはほぼ同時期に活躍したドイツの作曲家。当時の名声はバッハをはるかに凌ぎ、また、多作家としても有名で、その作品数はバッハとヘンデルの全作品数を合わせたよりも多いという。

この幻想曲は、フルート・トラヴェルソ（横笛）のために書かれた「12の幻想曲」の第3曲にあたる作品。1732、33年にハンブルクで出版されている。この場合の「幻想曲」とは、自由な形式で作曲されたという意味ではなく、むしろ、バロック時代のソナタの趣が強い。このロ短調も、緩い部分と急速な部分が交替する第1楽章とジーク風の急速なテンポの第2楽章とでできている。なお、本日はイ短調で演奏される。（安藤 博）

### ●受難曲のアリア／アルブレヒツベルガー

アルブレヒツベルガー（1736～1809）は、ウィーンで活躍した作曲家・オルガン奏者・音楽理論家。1793年からの後半生には、ウィーンにおける教会音楽家として最高のポジションである聖シュテファン大聖堂の楽長をつとめた。また、ハイドン、モーツァルトなどとも親交があり、音楽理論家、とくに対位法の大家として尊敬を集めていた。教え子の中でも有名なのがベートーヴェンで、アルブレヒツベルガーといえば、一般的には「ベートーヴェンの先生」としてその名前が知られている。出版されている楽譜は大変少ないが、中でもトロンボーン協奏曲は、この楽器のための数少ないオリジナル作品として愛好されている。この曲（原題：Aria de Passione Domine, ca.1757）は、本来アルト独唱のためのアリアで、トロンボーンの助奏と弦・オルガン・通奏低音をともなっている。（安藤 博）

### ●トロンボーンとピアノのためのソナチネ／セロツキ

ポーランドを代表するアヴァンギャルド音楽推進者の一人であり、年々その名声が高まっているセロツキは、'50年代の初めにジュリアス・ビートルコヴィッチとの親交によりトロンボーン協奏曲、トロンボーン・カルテット、そしてこのソナチネを書くこととなり、これらの作品はクラシックのトロンボーンの特徴を十分に引き出したレパートリーとして定着している。（倉田 寛）

### ●Pastime—for Trombone and Piano／勝永佳子

この曲は8年前の、倉田さんも私も芸大在学中の作品である。曲名の「Pastime」は気晴らし、娯楽、遊戯などの意味があり、トロンボーンとピアノが気楽に戯れる様子を表現した。トロンボーンのさまざまな魅力を集約したつもりである。（勝永佳子）

### ●「金管のための5つの小品」より ミッピー2世のためのエレジー／バーンスタイン

ウエストサイド物語で特に有名な作曲家であり指揮者でもあるバーンスタインのこの曲は兄弟飼犬のミッピー2世のために作曲された。この他にも犬のための作品が4曲あり、「金管のための5つの小品」としてまとめられている。（倉田 寛）

### ●3つの前奏曲／ガーシュイン

この3つの前奏曲は当初6曲から成るピアノのための前奏曲として作曲され、1925年に彼自身によってそのうちの5曲が初演された。だがその後オリジナルとして出版されたのは本日演奏する3曲のみである。3曲ともガーシュインらしい都会的に洗練された小品であり、特に2曲目はブルースの香りの濃い作品となっている。